

思いやりのある児童を育む学級活動

ー PDCA サイクルを基盤に，

相手を意識した活動の工夫を通して ー

本研究室では，児童の課題である「よりよい人間関係」は，相手の立場や気持ちを理解し他者へ働きかけようとする「思いやり」を基盤として築かれると考えた。

そこで，思いやりのある児童を育むために，PDCA サイクルを基に教科・他領域と連動させた学級活動(1)(2)の中で，相手を意識させる活動の工夫すなわち，①相手を意識したためあてづくり②自己有用感を高める相互評価③協働する喜びを感じさせる小集団による活動④活動内容や評価の見える化を行った。そして，思いやりのプロセスとしての具体的行動（思いやり行動）の観察による見取りと思いやり測定尺度を基にした実態調査により，児童の思いやりの変容を検証することにした。

その結果，児童には，自分にできることを，身近な友達に，さらには学級・学年に，そして学年を越えて全校にまでも，助け合い協力し合いながら働きかけるといった行動が表れてきた。実態調査の結果からも思いやりのある児童の育ちが見えてきた。

福岡市教育センター 特別活動研究室

第Ⅰ章 研究の基本的な考え方

- 1 主題について……………特活-1
 - (1) 主題設定の理由
 - (2) 主題及び副主題の意味
- 2 研究の目標……………特活-3
- 3 研究の仮説……………特活-3
- 4 研究の構想……………特活-3
 - (1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成
 - (2) 相手を意識させる活動の工夫
 - (3) 実態調査と行動観察による見取り
- 5 研究構想図……………特活-4

第Ⅱ章 思いやりのある児童を育む学級活動

研究の実際と考察

- 1 A 小学校 第2学年の実践……………特活-5
 - 学級活動(1)
 - 議題名「広げよう！元気なあいさつ」
- 2 B 小学校 第1学年の実践……………特活-11
 - 学級活動(2)
 - 題材名「めざせ！おそうじめい人」
- 3 C 小学校 第4学年の実践……………特活-17
 - 学級活動(2)
 - 題材名「4の1ステップアップ計画 ～係活動で学級の力を高めよう！～」

第Ⅲ章 研究の成果と課題

- 1 研究の成果と課題……………特活-23
 - (1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成について
 - (2) 相手を意識させる活動の工夫について
 - (3) 実態調査と行動観察による見取りから
- 2 コメント……………特活-25

資料等……………特活-28

I 章 研究の基本的な考え方

1 主題について

(1) 主題設定の理由

ア 教育の動向から

教育課程の編成に関する基礎的研究・報告書^{5 1)}では、「グローバル化」「資源の有限化」「少子高齢化」などの社会情勢の変化の中で「第2期教育振興基本計画審議過程報告で教育目標としての「生きる力」が、「社会を生き抜く力」として「自立・協働・創造を軸とした生涯学習社会の基盤に位置づけられた。多様で自立した個人が協働することにより、新しい価値や社会を創造することが期待されている。」と述べられている。わたしたちの生きる社会は多様な人と人との関わりの中で構成されている。それゆえ、その中で生まれる課題も人との関わり合いの中で話し合い、考えを創り出して解決していかななくてはならない。しかしながら、少子化や高度情報化社会の急激な進展は、人間関係を希薄化させ自分とも他者ともうまく関わらず人間関係を築けないことに起因する社会事案を多発させている。これらのことから、児童にとって、人と関わり合いながら課題を解決し、これからの社会を生き抜いていくための人間関係を築く力の育成は、喫緊の課題である。本研究では、小学校における児童の「よりよい人間関係」は、相手の立場や気持ちを理解し他者へ働きかけようとする「思いやり」を基盤として築かれると考えた。思いやりは心的な状況であり、その育ちの評価は難しい。そこで、思いやりを具現化する具体的行動(以下：思いやり行動)を思いやりのある状況としてとらえることにした。思いやり行動は、相手に対する共感性^{注1}に強い影響を受ける。つまり、相手の気持ちや立場を分ろうとする相手意識をもつことがまず大切である。そこで、「相手を意識した活動の工夫」を行い、主題「思いやりのある児童を育む学級活動の在り方」を研究することにした。

イ 特別活動の役割から

平成27年8月に出された学習指導要領改訂の論点整理では、育成すべき資質・能力について、知識・理解とその活用だけでなく学びに向かう力や人間性の育成の涵養について述べている。白松氏²⁾が「特別活動はこれまでも、児童の協働や自律に関わる社会的能力の育成を担ってきた。学級や学校を社会と見立てて、社会に出て生きる力を、学級や学校の中で生活する力を通して育んできた。」と述べているように、生活改善のための活動を通して社会参画意識や自己実現のための力を養う特別活動は、仲間との関係やルール、争いの処理などを児童自身が他者と力を合わせて再構成したり再構築したりする力を育む。そこでは、集団を助けようとしたり、個々の人々のためになることをしようとしたりする、相手への思いやりとその気持ちを具現化する思いやり行動が不可欠である。このような観点から、思いやりのある児童を育む「相手を意識した活動の工夫」の研究は、価値高いと考える。

ウ 児童の実態から

文部科学省学校基本調査によると、平成25年度の小中学生の不登校児童数は前年度より7000人増加した。不登校のきっかけは友人関係が全体の約50%を占めている。その他、先生との関係、クラブや部活の先輩・友人との関係、親との関係、学校・学級になじめないなど人間関係に関する項目が圧倒的に多い。児童・生徒を取り巻く他者との人間関係の危うさや不確かさが推測される。身近な例では、相手の話を最後まで聞かないことでいさかいが起こったり、自分のやりたいことや思いを優先させて周りを不愉快な気持ちにさせたりする児童の実態が見られる。相手の立

場や気持ちを慮って、自分のできることを考え率先して行動することができる、友達に対して共感的に行動することができる、互いのよさを認め学級集団のために仲間と力を合わせて行動することができるといった思いやりのある児童を育む必要がある。

(2) 主題及び副主題の意味

ア 主題について

(ア)「思いやりのある児童」とは

思いやりのある児童とは、相手の立場や気持ちを理解しようとし、互いのよさや個性を認め合い、相手のために働きかけ行動に表すことのできる児童のことである。相手とは、ここでは、行為の主体である自分自身、行為の対象である友達、自身が所属する学級集団のことである。そこで、以下の三つの姿から思いやりのある児童を見取ることにした。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 自分のできることを考え、率先して行動することができる児童② 友達に対して、共感的に行動することができる児童③ 互いのよさを認め、学級集団のために仲間と力を合わせて行動することができる児童 |
|---|

①②③に示す児童の姿は、活動の中で流動する。①の姿が核になりながら、行為の対象者の立場や気持ちを意識した②③の姿に変容し、更に①の姿が高まっていくことを期待している。

(イ)「思いやりのある児童を育む学級活動」とは

思いやりのある児童を育む学級活動とは、学習指導要領に示される、低学年での「仲良く助

資料-1 人間関係を形成していくことができる能力

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">1 自分とは価値観や意見が異なる人や感じ方が違う人がいるということに気付く力。2 自分とは価値観や感じ方が違う人の意見をよく聞くことができる力。3 自分の意見や感じ方を相手に伝わるように表現する力。4 相手の立場になって考えたり感じようとしていたりすることができる力。5 自分と他者の意見の共通点、対立点を整理して把握することができる力。6 自分と他者のしたいことやしてほしいことの共通点と対立点とを整理し、折り合うことを考える力。7 折り合うための提案をし、合意を形成する力。8 合意に基づき行動を起こして互いに満足な結果を得たことを客観的に把握し、互いに喜び合うことができる力。 |
|--|

「新訂キーワードで拓く新しい特別活動」(日本特別活動学会監修, 2010)

け合う」活動、中学年での「協力し合う」活動、高学年での「信頼し支え合う」活動を通して、前述(ア)で述べた児童を育む学級活動である。

左記(資料-1)で示されているように、人間関係を形成していくためには自分の立場や思いだけでなく、相手の存在が不可欠である。友達と仲良く助け合い協力し合い信頼し支え合う「相手を意識した」活動を通して、自分たちの抱える課題を解決する

ために、あるいは目標を達成するために行動し、達成感を味わう体験を積み上げていく。その過程で思いやりは育まれ、人間関係を形成する能力は育つと考える。

そこで、年間を通して意図的、計画的に作られた「相手を意識した」学級活動の全体計画を基に、他教科・領域・学校行事と学級活動(1)と(2)を関連させながら課題解決のための体験を積み上げ、思いやりのある児童を育んでいきたい。

イ 副主題について

(ア)「PDCA サイクルを基盤に」とは

PDCA サイクルを基盤にとは、児童の活動目的や意欲が連続していくように、学級活動の年間指導計画と個々の実際の活動に改善検証サイクルを位置付けることである。

(イ)「相手を意識した活動」とは

相手を意識した活動とは、児童が学級活動のPDCA サイクルの中で、相手の立場や気持ちになって考え、自分の意志や判断をもって問題解決のために行動する活動のことである。

(ウ)「PDCA サイクルを基盤に相手を意識した活動の工夫」とは

道徳、総合的な学習の時間、生徒指導・学校行事等の教育活動と学級活動(1)と(2)を関連させ、相手を意識した年間指導計画を立てるとともに、一連の活動過程の中で、(ア)相手を意識したためあてづくり (イ)自己有用感を高める相互評価 (ウ)協働する喜びを感じさせる小集団による活動 (エ)活動内容や評価の見える化 の4つの手だてを行うことである。この4つの手立ては、伊藤氏³⁾が「向社会性と動機付け」に思いやり行動をうながすための共感性を高める4つの要素として著している①行動に対する価値の自覚 ②活動に対する効力感の自覚 ③仲間からの援助経験の自覚 ④活動の認知化 の観点から設定した。

2 研究の目標

PDCA サイクルを基盤に、児童が相手(学級内外の友達・他者)を意識した、活動の工夫を通して、思いやりのある児童を育む学級活動の在り方について明らかにする。

3 研究の仮説

学級活動におけるPDCA サイクルを基盤とした活動過程の中で、道徳、総合的な学習の時間、生徒指導・学校行事等の教育活動と学級活動(1)と(2)を関連させ、相手を意識した年間指導計画を立てるとともに、相手を意識させる活動の工夫として次の4点を行えば、思いやりのある児童を育むことができるであろう。

(ア)相手を意識したためあてづくり (イ)自己有用感を高める相互評価
(ウ)協働する喜びを感じさせる小集団による活動 (エ)活動内容や評価の見える化

4 研究の構想

(1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成

道徳、総合的な学習の時間、生徒指導・学校行事等の教育活動と学級活動(1)と(2)の関連を図り、学級活動の年間指導計画を作成する。その際、特別活動が相手を意識した活動になるように、PDCA サイクルに基づいて計画・実施する。

(2) 相手を意識させる活動の工夫

ア 相手を意識したためあてづくり (めあて・振り返りシート)～行動に対する価値の自覚

活動に入る前に立てる自分のめあてと共に、それを達成することにより自分の周りの人や学級、学校はどのように変わるか、どのようなよい影響があるかを想像、予想して書く欄を設ける。自分の行為が周りに与える影響を考えさせることで、取組に対する価値付けを行い、他者を意識して考えたり実践したりすることができるようにする。

イ 自己有用感を高める相互評価 ～活動に対する効力感の自覚

自分の行動への自信と存在への有用感を高め、学級全体の認め合う風土を育てたり、活動意欲を高めたりするために、「ありがとうカード」や「がんばろうカード」を作成・活用する。活動の中で、頑張っている児童のよさを認める「ありがとうカード」や活動に対して応援をする「がんばろうカード」を用意しておき、自由に書けるようにする。

ウ 協働する喜びを感じさせる小集団による活動 ～仲間からの援助経験の自覚

学級活動(1)では同じ活動内容、学級活動(2)では同じめあてを立てた児童同士でグループを組み、小集団で活動していく。意図的に同グループ内での相互評価の時間を設定することで、共

通の目標に向かって取り組む仲間同士で互いの頑張りを認め合ったり、励まし合ったりする機会を増やしていく。そうすることで、協働する喜びや他者の喜びを自覚させ、相手の立場に立って他者へ関わろうとする思いやり行動を促していく。

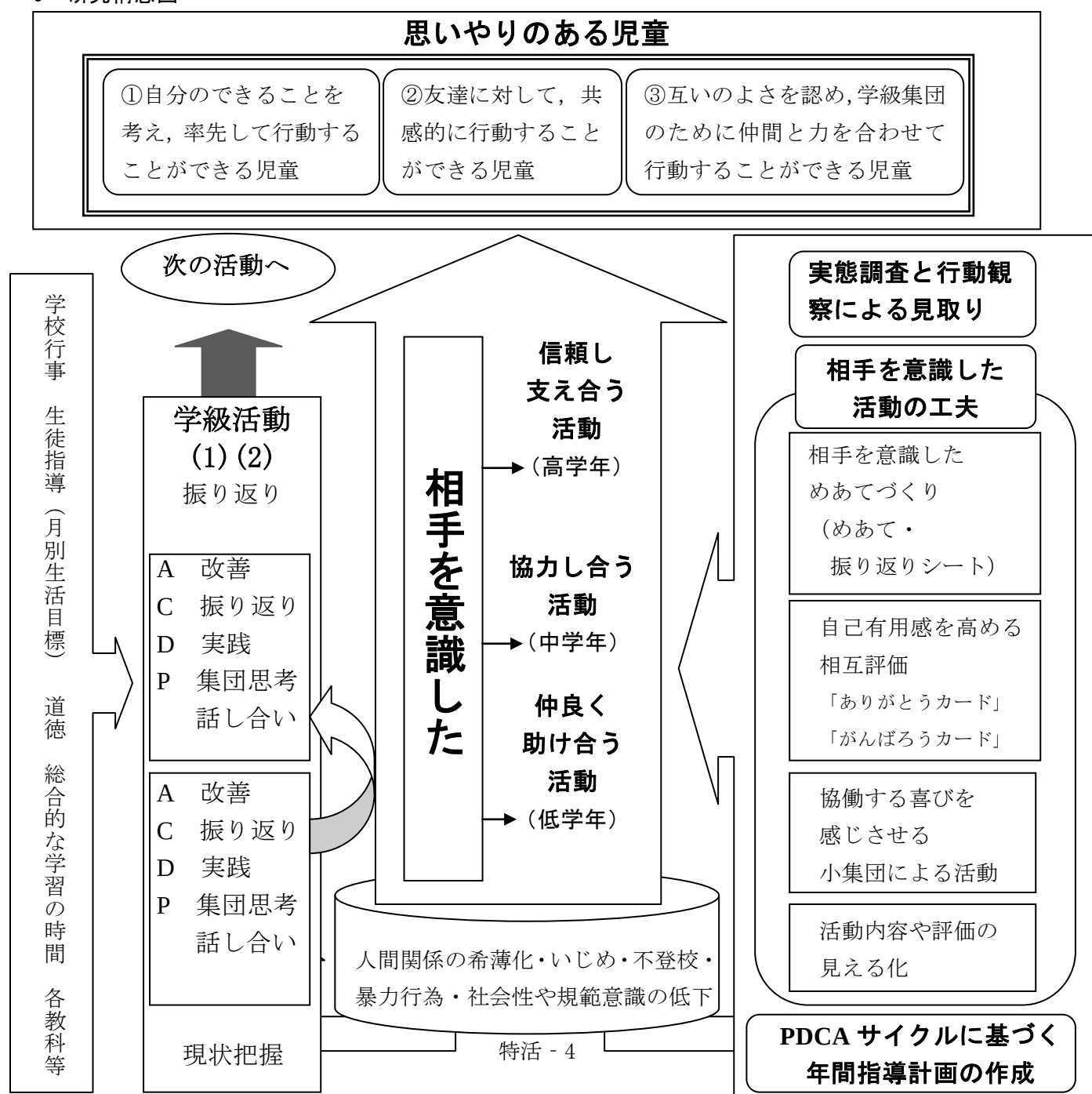
エ 活動内容や評価の見える化 ～活動の認知化

活動の様子や相互評価し合う写真や文章を紹介し、取組に対する自他のよさや課題に気付いたり、次の取組への活動意欲を高めたりすることができるようにする。

(3) 実態調査と行動観察による見取り

本研究では、児童の「思いやり」について、実態調査アンケートと児童の行動観察を基に仮説を検証する。実態調査アンケートについては、活動の事前と事後に行い、意識の変容を調べる。この実態調査アンケートは、安達圭一郎⁴⁾「児童・生徒の思いやりに関する発達の研究」における思いやり測定尺度を基に、本研究室で作成した学級活動アンケートと SEL-8S 自己評定尺度を使用する。行動観察からは、児童の言動の変化を見取り、変容・高まりを記録する。

5 研究構想図



第Ⅱ章 思いやりのある児童を育む学級活動

1 A小学校 第2学年の実践

(1) 議題名

「広げよう！元気なあいさつ」

(2) 目標

- 自分の考えをもち、自分のできることを考え、友達と仲良く助け合いながら集会を成功させようと意欲的に活動している。(関心・意欲・態度)
- 集会活動を通して、自分や友達のよさに気付き、意見や感じ方が異なる友達にも自分の考えを伝えたり友達の思いをくみ取ったりしながら、よりよい考えを生み出し、行動することができる。(思考・判断・実践)
- 話し合ったことをもとに、役割を分担したり友達と協力して活動したりすることの大切さに気付くことができる。(知識・理解)

(3) 本議題と思いやりのある児童との関連

本議題は、他者とコミュニケーションを図る第一歩であり、豊かな人間関係を築いていくために必要な基本的生活習慣スキルであるあいさつを軸に展開した。

本議題で活動する前に、児童は、9月の道徳「たびに出て」(2ー(1)気持ちのよいあいさつ)、学級活動(2)「にこにこあいさつ大きくせん」という一連の学習過程の中で、あいさつが自分や相手に与える影響やどんなあいさつの仕方をすれば、自分も相手も気持ちよくなるのかを考えたり、自らそれを実践したりして、自分のあいさつに自信をつけてきた。そこで、自分たちのあいさつを学校全体にも広げ、あいさつがあふれる学校になるといいなという思いから、2年生の他の学級の友達や他の学年に、元気なあいさつを広げる活動をしようということになった。みんなで話し合っ
て決めた内容を実践し、自分たちができることを考え、やり遂げたという満足感を味わい、あいさつする友達や一緒に活動する仲間の思いを意識しながら行動するという思いやりの気持ちが養われるのではないかと期待し、本議題を設定した。

まず、2年生の他の学級を招待して行う「広げよう！元気なあいさつ集会」に向け、学級のめあての他に、出し物のグループごとでもめあてを決めたり、そのめあてを達成すると周りの誰がどんな風になるかを考えたりしながら、働きかけようとする相手を常に意識させて活動するようにする。グループ内で相互評価したり、他のグループにアドバイスをする時間を意図的・計画的に設定し、仲間同士で互いの頑張りを認め合ったり、励まし合ったりする機会を増やしていく。そうすることで、協働する喜びや他者の喜びを自分の喜びとして感じ、相手の立場に立って他者へ関わろうとする態度を育てたい。

その後、2年生だけにとどまらず、元気なあいさつを学校全体に広げ、明るく楽しい学校にするための取組を考えさせたい。実践していく中で、他の学級の2年生や兄弟学年である5年生にも協力を呼びかけ、仲良く助け合い、学級を越えて自分たちの活動が広がっていく体験をさせたい。

また、それぞれの活動の中で、互いに協力して取り組む様子の写真などを掲示し、活動の意欲付けをすると共に、達成感や充実感、他者と助け合って活動することの心地よさを感じさせたい。

このような期待する児童の姿から、本議題の実践は、思いやりのある児童を育むことにつながるのではないかと考える。

(4) 実践内容

9月～兄弟学年である5年生との週に一回の交流給食（異年齢集団による交流）

12月 生徒指導 月別生活目標「気持ちのよい挨拶や正しい言葉づかいをしよう」

学級活動（1）「広げよう！元気なあいさつ」事後の活動2

DCA11月24日 あいさつキャンペーン結果報告（昼の放送）

DCA11月18～20日 あいさつ隊活動（朝の登校時間）



PD11月13日 あいさつキャンペーン実施のお知らせ（昼の放送）

PD11月12日 2年生、5年生へあいさつ隊協力をお願い（給食時間）

PD11月9日～ あいさつ隊ポスター、たすき作製

あいさつ

学級活動（1）「広げよう！元気なあいさつ」事後の活動1

DCA10月27日 学年集会「ひろげよう！元気なあいさつ集会」



学級活動（1）「広げよう！元気なあいさつ」本時 学級会

P10月21日 柱1 出し物の工夫を考えよう。

柱2 あいさつを他の学年に広げる方法を決めよう。

学級活動（1）「広げよう！元気なあいさつ」事前の活動

P10月19日 議題説明会

10月15～20日 集会の準備

10月14日 集会の内容決定、役割分担

10月8日 議題の決定

学級活動（2）「にこにこあいさつ大さくせん」

DCA9月29日～10月5日 自己決定したことの実践・振り返り

P9月28日 本時 「気持ちのよいあいさつの仕方を考えよう」

P9月11日 道徳「たびに出て」2－（1）気持ちのよいあいさつ

5月 生徒指導 月別生活目標「気持ちのよい挨拶や正しい言葉づかいをしよう」

(5) 研究の実際と考察

〈研究の手だて〉

(1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成

前頁のように、「あいさつ」を軸に、生徒指導の月別生活目標や異年齢交流、道徳、学級活動(1)、(2)の内容と有機的に関連させて指導した。各活動の実践と振り返りが次の活動へつながっていくため、自然な流れの中で個から学級、学級から学年、学年から交流学年、学校全体へと活動の対象や内容が広がり、相手意識や活動に対する意欲を高めることができた。

(2) 相手を意識させる活動の工夫

ア 相手を意識しためあてづくり (めあて・振り返りシート) ～行動に対する価値の自覚

活動に入る前に、自分の行動に対する価値を自覚させてから実際の活動ができるように、めあて・振り返りシートを作成・活用した。シートには自分やグループの立てためあてを達成することで周りにどのようなよい影響を与えるか、また自分はそれを受けてどんな気持ちになるかを予想して書く欄を設け、相手を意識して活動できるようにした。(資料-1)

資料-1 めあて・振り返りシート

ひろげよう! 元気なあいさつ しゅう会

めあて・ふりかえりシート

2年 くみ ばん ()

クラスのめあて 自分たちの がんばっている あいさつを 1・2くみの みんなにも 教えて、 気持ちのよい あいさつが あふれる 学年や 学校に しよう。

グループのめあて あいさつをした日やの 気持ちのよさを 伝えよう。

自分のめあて 1・2くみ がわかりやすいように 会話を 大きくかく。

めあてを たっせいすると こんなふうになるよ

まわりの人 だれ がんばる 学校 元気な 学校

自分 がんばることが できるよ なるよ 元気な なるよ

★ふりかえってみよう!★

①自分の めあてに そって とりくむことが できましたか。(◎・○・△)

②友だちと なかよく たすけ合って かつどうできましたか。(◎・○・△)

③友だちの よいところや がんばったところを 見つけられましたか。(◎・○・△)

★かんそう (かんじたこと・学んだこと・がんばったこと・せいちょうしたこと)

ほうそうかいであいさつの7つのポイントが できてから ぜんこうにひろがっているといいなと思います。

1・2くみも 元気なあいさつが できてよかったです。

かくしゅうは、しゅう会の れいしゅうも あってたい へんだら けどほんばんに きて あってよかったです。

これからは 元気なあいさつをつづけてたいです。

2年生が 元気なあいさつをして、ぜん校のみんなに あがっていていいね。あいさつした人も がんばろう。

イ 自己有用感を高める相互評価 ～活動に対する効力感の自覚

活動の中で他者のよさを認め感謝する「ありがとカード」や活動に対して応援したりアドバイスしたりする「がんばろうカード」を用意し、自由に書けるようにした。また、活動途中でも活動の見直しをしたり、他の児童のよさに気付かせたい時に、意図的に記入する時間を設定したりした。

カードの中には、「がんばろうカード」に書いてもらった工夫(資料-2)を取り入れ、自分たちの取組を付加修正してよりよくできたことに感謝したり、もらったアイデアを生かして紙芝居を作製したおかげで自分だけではなく見ている人のためにもなったことに気付いたりしていた。(資

資料-2 がんばろうカード



料-3)

「ありがとうカード」をもらった児童は、他者に認められた喜び、自分の活動・行動に対する有用感を感じることができていた。カードのやり取りは、自分への自信と誰かの役に立てた、誰かに必要とされているという自己有用感を高めることに役立った。

資料-3 ありがとうカード



ウ 協働する喜びを感じさせる小集団による活動

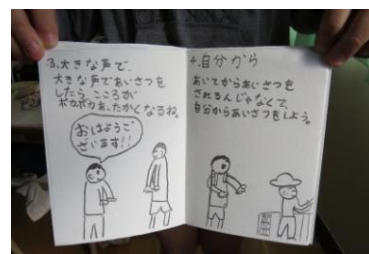
～仲間からの援助経験の自覚

広げよう！元気なあいさつ集会に向け、ペープサート、〇×クイズ、紙芝居、劇、本の5つのグループに分かれて出し物の道具の用意や練習をした。初めにグループ内で話し合いを設けてめあてを決めて活動に入った。準備段階において意図的に同グループ内で相互評価の時間を設定し、ここでも前述の「ありがとうカード」を活用しながら互いの頑張りを認め合ってきた。同じ目標を達成するために、友達と仲良く助け合う活動過程の中で児童相互の結び付きを強め、協働する喜びや他者の頑張りを共に分かち合うことができた。このようなやりとりが日常化することで、グループを超え、学級全体の認め合う風土が育成されている。

集会で他の学級の2年生に配った手作りの「あいさつの7つのポイント」の本（資料-4）を放送朝会で校長先生に紹介してもらったことで、児童は自分たちの学級の取組が全校へと広がっていく手ごたえを感じていた。また、それを見た3年生が係活動の1つとして2年生の本作りの取組を真似て、「上手なそうじのしかた」「ろうかの歩き方」などの手作りの本（資料-5）を作って学級で読み聞かせをしたという。その事実を児童に伝えと、自分たちの活動が意外な形で他の学年に広がったことに驚くと同時に、自分たちの活動に自信をつけた。本グループではなかった児童も、学級の仲間の頑張りと素直に喜ぶ姿が見られ、友達に対する思いやりが育まれていることを実感できた出来事だった。

続く「あいさつキャンペーン」の取組では、以前保健委員会がしていた「右足キャンペーン」という活動を真似して「あいさつをしている人の数を数えて、全校にお知らせしたい。」と計画した。その際、廊下に立ってあいさつする人の数を数えるだけでなく、自分たちも「あいさつ隊」としてポスターを持ってあいさつし、全校にあいさつを広げようということになった。学級だけでは人数が足りないで、他の学級の2年生や5年生にも協力を呼びかけ、参加してくれた人たちで7～8人のグループを組んで3日間登校時に活動した。（資料-6）5年生はいいても、リーダーは学級の中で決め自分たち発信の取組である責任をもたせた。また、同じたすきをつけて活動することで、一体感を出しつつ意欲的に活動できるようにした。担当の日ではなくても自主的に参加する児童も見られ、あいさつを交わす喜びを感じる姿、仲良く助け合って活動する楽しさを味わっている姿が見られた。

資料-4 2年生の手作りの本



他学年へのよい影響

資料-5 3年生の手作りの本



資料-6 あいさつ隊の活動



エ 活動内容や評価の見える化 ～活動の認知化

あいさつを広げるための集会やあいさつキャンペーンをしても、児童がその後の学校の変化や友達の気持ちの変容に気付くことは難しい。そのため、自分たちの活動がどのようによい影響を与えていたかを自覚させるために、校長や教頭、同学年や兄弟学年の担任、参考にさせてもらった「右足キャンペーン」を実施していた養護教諭などに「ありがとうカード」を書いてもらい、2年3組の児童の活動についてのコメントをもらい、掲示した。「全校放送をして全校に呼びかけたみんなのパワーに感動しました。」「5年生も一緒に活動できて嬉しかったです。」「3組のような元気なあいさつをめざします。」など、掲示されたコメントを読み、満足感、達成感を味わっていたようだった。感想の中には、「全校に広がっているのか不安だったけど、先生たちからのお手紙を読んで、あいさつが広がってきたのかなと思ってうれしかったです。」という言葉もあった。意識的に活動に対する評価を伝え掲示したことは、取組に対する自他のよさに気付かせ、次の取組への活動意欲を高めることに有効であったといえる。

また、活動の様子は動画でも記録し、初めの自分たちのあいさつの様子から、どんどん上手になっていく姿、人のために頑張る姿などを折々で見せ、客観的に自分たちの姿を把握できるようにしたこと、よさや課題に気付く目が養われていった。

資料－7 思いやりのよつばの絵



さらに、2学期になって発足した学級で見つけた友達のよさやがんばりを帰りの会で発表するという「にこにこよつば係」の活動に合わせて、学級内での思いやり行動が見られたときは背面掲示板の児童の絵の中にハートを貼っていくようにした。思いやり行動のハートが4つ貯まると、学級のシンボルマークである四つ葉のクローバーが出来上がるという仕組みである。(資料－7) 目に見える形で思いやり行動の結果を表していったことにより、児童は学級に思いやりの気持ちが広がっていていることを実感し、学

級の成長を喜ぶ姿が見られた。初めは教師側が紹介していた思いやり行動でも、その都度全体に知らせ、みんなでハートを貼っていったことにより、徐々に児童が思いやり行動をとっている姿を見つけるようになった。自ら率先してしたことを知らせに來たり、してもらった児童が知らせに來たり、自分は関わりはなくても友達同士のやりとりを見ていた児童が知らせに來たりという風に、思いやり行動を感じ取る力が高まっていった。今も、「2年生が終わる頃には、みんなの思いやりで四つ葉で絵が埋まるくらいになっていたらいいね。」という声が聞かれることから分かるように、児童の頑張りや成長が見える化して掲示し、それをその都度更新していくということは、児童の活動意欲の継続につながったと言える。

〈児童の意識の変容〉

(3) 実態把握アンケート

本研究では、学級活動に関わる児童の「思いやり」について、実態調査を実践の事前と事後に行い、意識の変容を調べた。回答は「とても当てはまる(4点)、まあまあ当てはまる(3点)、あまり当てはまらない(2点)、全く当てはまらない(1点)」から選択し、最高点4点×クラスの人数を100%として考え、それぞれの質問項目ごとの平均値を算出した。

学級活動アンケートでは、「思いやりのある児童」の3つの姿(①自分のできることを考え、

率先して行動することができる ②友達に対して共感的に行動することができる ③互いのよさを認め、学級集団のために仲間と力を合わせて行動することができる）に関する思いやり行動の有無を問うた。その結果からは、①の自分自身のことよりも、②や③の友達、学級集団に対する思いやり行動の方が伸びを示していることが分かる。学級全体での取組を行うことにより、実際に活動し、自分の思いやり行動を自覚することができたためではないかと考えられる。（表－1）低学年の児童にとって、自分がとった言動を記憶に留めておくことは難しいが、その都度振り返りを行ったり、写真やカードで活動の様子や評価を見える化したりしたことで、自分の思いやり行動を認識することができたのだと思われる。また、SEL-8S アンケートでも、友達との関わりに関する項目に伸びが多く見られる。（表－2）「あいさつ」を軸に、みんなで役割を分担してその実現のために協働的に活動してきたことで、集団の一員であることを意識して、仲間と共に活動しようとする児童が育ってきたことの表れではないかと考える。児童の言動の見取りからも、「〇〇さんのおかげでできるようになった。」「みんなでできてよかった。」など、協働する喜びを感じるような言葉が聞かれたり、あいさつキャンペーンの結果を全校放送している友達に、教室から放送室へ「頑張ったね。」の拍手を送ったりする児童の姿が見られた。

このことから、相手を意識した仲良く助け合う活動を行ったことにより、思いやりのある児童が育まれたと考えられる。

表－2 SEL-8S アンケートの結果

表－1 学級活動アンケートの結果

	質問項目	9月	11月
① 自分 に	教室や廊下に落ちているごみを自分から拾いますか。	75	77 ↑
	自分が見つけた花や生き物を教室に持ってくるがありますか。	51	50
	そうじのとき、みんながいやがってしないところも、進んでしますか。	79	76
	自分でやってみてうまくいったやり方を、友達に教えてあげますか。	77	78 ↑
	係活動で自分からアイデアを出したり、進んで係の仕事をしたりしていますか。	76	76
	平均	72	71
② 友 達 に	友達が悲しんでいる時、そのわけを聞いてあげたり、一緒に考えてあげたりしますか。	89	85
	大事な物を落としたりなくしたりした友達がいたら、一緒に探してあげますか。	77	90 ↑ +13
	友達の失敗で試合やゲームに負けても、友達のせいにせず許すことができますか。	91	90
	仲間外れにされている友達がいたら、遊び仲間に入れてあげますか。	85	93 ↑ +8
	友達がいじわるをされているとき、注意をしたりやめさせようとしてしますか。	87	91 ↑
	平均	85	90
③ 学 級 集 団 に	みんなで遊ぶ日には参加していますか。	84	81
	みんなで決めたことを守ることができていますか。	81	90 ↑ +9
	体育や図工など、みんなが準備や片付けをするときに、進んで動くことができますか。	88	91 ↑
	友達や学級のがんばりに拍手したり「すごいね」とほめたりしますか。	83	87 ↑
	みんなで決めたためあてや目標を達成できるようにがんばっていますか。	89	94 ↑ +5
	平均	85	89

		質問項目	9月	11月
①自分のできることを考え、率先して行動することができる児童	自己への気付き	自分の気持ちがわかる。	88	86
		自分の気持ちの変化がわかる。	82	88↑ +6
		自分のできることとできないことがわかっている。	89	92↑
		平均	86	89
	責任ある自己決定	自分だけ意見が違っても、自分の意見をはっきり言う。	76	81↑ +5
		ものごとを、よく考えてから決めることができる。	86	90↑
		係の仕事をするとき、何をどうやったらいいか、自分で考えて決める。	82	84↑
		平均	81	85
	奉仕活動	困っている人を見ると、何かしてあげたくなる。	78	86↑ +8
		自分がしてもらいたいことを、友達にもしてあげる。	78	83↑ +5
		人の役に立ちたいと思う。	85	81
		平均	80	83
②友達に対して共感的に行動できる児童	他者への気付き	友達のいいところを見つけることができる。	88	86
		友達の気持ちがわかる。	84	82
		友達が何かじょうずにできたとき、「じょうずだね」とほめる。	84	85↑
		平均	85	84
	対人関係	友達の気持ちを考えながら話す。	77	86↑ +9
		相手がききづかないように話す。	80	81↑
		人の話をしっかりと聞く。	84	79
		平均	80	82

2 B小学校 第1学年の実践

(1) 題材名

「めざせ！おそうじめい人」

(2) 目標

- 清掃活動に関心をもち、教室を綺麗にするための話合いに進んで参加したり清掃しようとしたりする。（関心・意欲・態度）
- よりよい清掃活動にするために、友達の見解を参考にして自分の掃除の仕方を決め、目標をもって継続的に実践することができる。（思考・判断・実践）
- どんな清掃活動がよいかを考え、実行する中で自分の役割や働くことの大切さを理解することができる。（知識・理解）

(3) 本題材と思いやりのある児童との関連

本題材は、友達とともにやる清掃活動の改善によって、教室がより綺麗になるばかりでなく、自分も周りの友達も気持ちがよくなることに気づき、仲間と力を合わせて活動し、みんなの役に立った心地良さを体験する中で、思いやりのある児童を育む学級活動について探るものである。

本学級の児童は、学級目標に「なかよし」を掲げ、みんなで遊んだり、学習に取り組んだりしている。一人一役での当番活動や係活動に一生懸命取り組み、さらにクラスが仲良くなるような改善策を考え、実行している姿がよく見られる。柔軟な発想力と行動力をもった児童が多いといった良さの一方、友達と話し合って折り合いをつけながら行動できる児童は少ない。また、自分の行動が周囲にどのような影響を与えるのか、どのような気持ちにさせるのか、想像して行動できる児童が少ないので、自分勝手な行動をとったり、自分の主張ばかりして喧嘩に発展したりすることが多い。

そこで、友達と助け合いながら活動し、助け合った成果が目に見える清掃活動を軸に学級活動を展開し、思いやりのある児童を育みたいと考えた。

1学期の生徒指導の目標「だいすきを守って掃除しよう」達成のために取り組んだ掃除分担、手順、方法を振り返る意味もあって、9月に道徳「はたらくことのよさをかんじて」（4-（2））の学習を行い、学校内外の様々な仕事の「働くことのよさ」は何かについて考えさせた。

児童は、「働く」と自分の気持ちがすっきりして良い。周りの人も気持ちよくなる。人の役に立つ。」と自分の体験を踏まえて考え、働くことの意味や働くことの価値をとらえた。

学校生活の中で考えたとき、清掃活動は、「働くことのよさ」をより感じられる活動である。「教室が綺麗になると気持ちよい。一生懸命掃除してみんな喜んでくれて良かった。掃除をやって気持ち良い」という一人一人の実感をもとに、「どうして教室が綺麗になったのか。」「一人の頑張りで教室を綺麗にすることはできたのか。」を考えさせたい。そうして、PDCAサイクルで自分達の掃除活動を検証しながら清掃技術を高めていく活動を通して、教室が綺麗になった喜びや気持ちよさを得るには、一人の力だけではできなかったこと、協力する仲間の存在が不可欠であったことに気付かせたい。友達と一緒に仲良く助け合ったから教室が綺麗になったこと、掃除をした自分だけでなく周りの友達や先生も気持ちよくなったこと、掃除活動が周りの人の役に立ったことを実感させ、思いやりの気持ちを育んでいきたい。

(4) 実践内容

生徒指導 月別生活目標

12月 「友達のいいところを見つけて、ほかほか言葉で話そう。」

11月 「感謝の気持ちをこめて、ありがとうを言おう。」

① ② ③ ④ 思いやりのある児童

11月19日
6年生が1の3に清掃活動見学に来る。
6年生からがんばろうカードをもらう。
11月10日
6年生の清掃活動を見学



助け合う活動
そうじ

わたしたちの頑張
りを見てほしい

P D C A

生徒指導 月別生活目標

10月 「一人の友達はいないかな？」
声をかけあおう。

10月30日
5年生が1の3に清掃活動見学に来る。
5年生からがんばろうカードをもらう。
10月15日
5年生の清掃活動を見学
5年生の素晴らしさに感動

9月11日 道徳
「はたらくことのよさをかんじて」
(4- (2) 勤労)

生徒指導 月別生活目標

9月 「一人の友達はいないかな？」声をかけあおう。

自分の頑張りを
見てほしい

D C A

P

学級活動 (1) 事後の活動 1

「そうじ大すきをもっとひろめよう」

11月27日 用務員の先生が清掃活動
見学に来る。
11月20日 用務員の先生へ、掃除部の
代表が掃除活動見学のお
誘いの手紙を渡す(昼休
み)。
11月11日～12日
清掃部：掃除ボックス・アンケー
ト・ポスター作成
11月2日 代表の児童が6年生へ清掃
活動見学のお願ひへ行く
(放課後)。

学級活動 (1)

「そうじ大すきをもっとひろめよう」

1

10月20日
有志により「清掃部」発足
中休み・昼休みに清掃開始。

10月16日～10月30日
自己決定したことの実践・ふり返り
10月15日 めあてを再度自己決定
する(帰りの会)
10月8日～15日
自己決定したことの実践・ふり返り

学級活動 (2)

「めざせ！おそうじめい人」 本時

10月7日
「もっと「だいすき」掃除ができるよ
うになる方法を考えよう。」
・ 5年生の掃除の様子と教室を手本と
して提示。

生徒指導 月別生活目標 ～だいすきを守って掃除しよう。～

6月 「時間いっぱい掃除をしよう。」

7月 「隅々まで掃除をしよう。」

4月 「清掃の始まりの時刻を守り、整列しよう。」

5月 「黙って掃除をしよう。」

(5) 研究の実際と考察

〈研究の手だて〉

(1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成

1 学期は生徒指導のめあて「だいすきを守って掃除をしよう」とつないで、毎日帰りの会で振り返りを行い、基礎的な掃除の手順や心構えを身につけることができた。

そこで、2 学期も、学級活動の中心を掃除に据え、清掃活動を通して友達と話し合っ

て折り合いをつけたり、自分の行動が周りの友達をどのような気持ちにさせるのか想像したりする場を設定し、思いやりを育んでいきたいと考えた。

2 学期に入ってすぐ、道徳「はたらくことのよさをかんじて」を行い、働くことの意味や価値を学ばせた。清掃活動や係活動に照らし合わせ、自分の行動を振り返らせた。その後、学級活動(2)「めざせ！おそうじめい人」を設定し、さっそく清掃活動の改善を行った。学級活動(2)で清掃活動に対する一人一人のめあてを立て、その実践を5年生の児童に評価してもらう場を設けた。

5年生の評価は自分達の掃除活動への自信をもたらした1の3の学級の掃除の良さをもっと多くの人に披露したいという気持ちを高めた。

そこで、学級活動(1)を設定した。「掃除だいすきをもっと広げよう」と6年生に自分達の掃除を評価してもらったり、用務員の先生に清掃方法を尋ねたりする活動へ広がった。その活動をさらに発展させ、児童たちは、有志で自発的に掃除部を発足し、時間外に清掃活動に取り組んだり(資料-1)、掃除部のメンバー募集を他学年に呼びかけたりポスターを作成したりする活動を生んだ。このように道徳で清掃の価値を学び、学級活動(1)、(2)を関連付けて実践したことで、活動が発展的に広がり、友達と励ましあったり、声を掛け合ったりするといった思いやり行動が見られるようになった。(資料-2)

資料-1 昼休みに階段掃除する児童たち



資料-2 机運びを手伝う児童



(2) 相手を意識させる活動の工夫

ア 相手を意識しためあてづくり(めあて・振り返りシート)～行動に対する価値の自覚

清掃活動を通し、自分がめあてを達成すると周りがどんな気持ちになるか想像させ書かせるようにした。しかし、学級活動(2)「めざせ！おそうじめい人」の本時では、自分のめあてを自己決定する段階で戸惑っている様子だった。その後、

一人一人が自分の立てためあてに向かって実践を重ね、実際に教室が綺麗になり、その結果、学級の子どもの気持ちも良くなったり、頑張り合う互いの関係が深まって仲良しになったり(資料-3)することに気づき、相手の気持ちを想像するようになった。

資料-3 めあてシート

じぶんのめあては	
(学校をきれいにしてみんなをきもちよくする。)	
じぶんが	このめあてをがんばるとまわりのみんなは
(うれしくてなにかよくていい)	
きもちになります。	

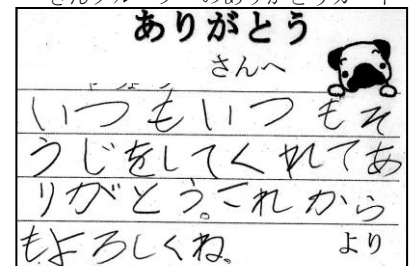
本時では「階段拭きを頑張る」や「黙って掃除をする」といった態度面と自分の清掃技術向上に関するめあてを掲げ活動に取り組んでいった。そのめあてが達成できたと感じるようになると、自分の清掃技術を用いて、教室だけでなく学校中を綺麗にしたいという気持ちが生まれ、活動が広がった。

これらのことから、相手を意識させためあてづくりと振り返りシートで相手の気持ちを想像させたことは、友達と仲良く助け合う行動を意欲的にさせ、思いやり行動を呼び起こすのに効果的だと考えられる。

イ 自己有用感を高める相互評価～活動に対する効力感の自覚～

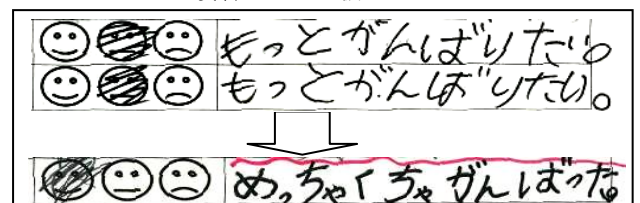
ありがとう・がんばろうカードはいつでも書けるように教室に常置するとともに、友達にすぐ渡せるように一人一人のポストを作成した。カードを活用し始めた頃は、同じめあてを立てたグループの友達同士でがんばろうカードを贈りあい、清掃活動に取り組む様子が見られた。しだいに、多くの友達が自分を励ましてくれることやみんなのために教室を掃除してくれることに気づき、違うめあてを立てたグループの友達にも感謝の気持ちを伝え始めた。ありがとうカードが増えたのも、その理由からだと考えられる。（資料—4）

資料—4 ほうきグループからぞうきんグループへのありがとうカード



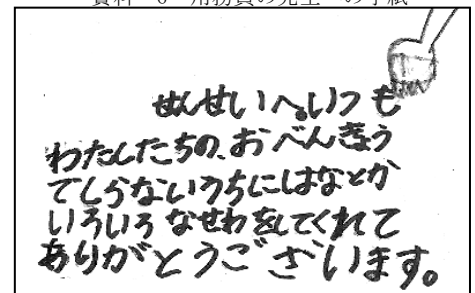
また、5年生に清掃活動を見に来てもらう機会を設定し、意図的に1年生に向けて、がんばろうカードを書いてもらった。児童は5年生からもらったカードを喜び、より意欲的に掃除に取り組み始めた。特に日々の振り返りで「頑張れなかった」と書き続けていた児童が、がんばろうカードをもらったことで自信がつき、「うれしかった。掃除を頑張ることができた。」と感想に変化が見られた。（資料—5）自信がついたことで振り返りを書く字も段々と丁寧に力強くなり、遊びや学習までも活発になってきた。

資料—5 振り返りシート



自信がついた児童たちは、最上級生である6年生にも1の3の清掃を見に来て欲しいと願うようになった。そこでも、5年生の時と同様にがんばろうカードをもらってさらに意欲が高まり、次は誰に見に来てほしいかという話合いが自発的に起こるようになった。そして、学校で一番の掃除名人は用務員の先生ではないかという意見が出始め、手紙で用務員の先生に1の3の掃除の見学を頼むことになった。そのことをきっかけにして学校の環境を整備してくださる用務員の先生の行動に目が向くようになった。（資料—6）日常的には関わりが薄くても自分達のために働いてくれている人がいることに気づき、用務員の先生に挨拶をするようになった。

資料—6 用務員の先生への手紙

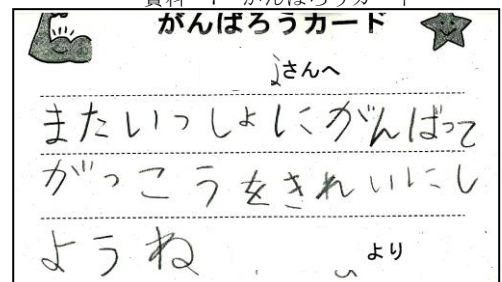


これらのことから、学級の友達はもとより、異学年や大人からの評価は児童の効力感を自覚させ、児童の活動範囲を広げるとともに自己有用感を高めた。

ウ 協働する喜びを感じさせる小集団による活動～仲間からの援助経験の自覚

お手本となった5年生の清掃活動を、「ここを頑張りたい。」と同じめあてを立てた児童グループで見学することにした。めあてが同じなので、同じ視点で、上級生の掃除を見ることができた。また、一人では気付けなかった5年生の良さもグループ内で振り返りを行うことでより多く気付くことができた。5年生を自分たちのモデルにして友達と協働することの良さを感じていることが、がんばろうカードからも分かる。（資料—7）

資料—7 がんばろうカード



エ 活動内容や評価の見える化～活動の認知化～

児童のめあては、本校の掃除のスローガン「だ（まっ）てい（いっしょうけんめい）す（すみずみまで）き（きれいに）」に分類して掲示したので「だいすき」を意識して清掃に取り組むことができた。また、それぞれのめあてが達成されたら、掃除名人として達成した時の姿を星形写真で掲示した。（資料—8）自分の姿が掲示されることにも貼られた数にも喜び、意欲的に清掃活動に取り組むことができた。初めのうちは教師が児童の頑張りを紹介することで星が増えていったが、しだいに児童が相互に頑張りを見つけ合うことで星が増えていった。このことから評価が見える化することは、自分の頑張りでなく友達頑張りの認めなど児童の活動の頑張りを自覚させるのに有効であった。また、「友達も星にのったら嬉しいだろうな。」と相手を思う発言が聞かれ、友達を励ます行動も見られた。写真による児童の表情や活動の見える化は、それを見る児童に相手を思う気持ちと呼び起こした。



〈児童の意識の変容〉

(3) 実態把握アンケート

本研究では、児童の「思いやり」についての実態調査を実践の事前と事後に行い意識の変容を調べた。学級活動アンケートとSEL-8Sのアンケート結果を見ると、どちらもほとんどの項目で伸びが見られた。

表—1①自分に対しての項目では、「係活動で自分からアイデアを出したり、進んで係の仕事をしたりしますか。」の伸びが著しく、自分のできることを考え率先して行動しようとしていることが分かる。その意欲は、表—2①の「人の役に立ちたいと思う。」気持ちの高まりと重なる。

具体的には清掃活動で、自発的に「掃除部」が発足し、メンバーの募集を帰りの会で学級内に呼びかけ、その後、学年、学校に呼びかけるためにポスターを作成したり（資料—9）、掃除をしたいところをみんなに聞くためにそうじボックスを作って意見を求め（資料—10）指摘された箇所を実際に掃除を行ったりする姿が見られた。

清掃活動から派生して、係活動も活発になり、給食時間に毎日クイズを出したり、教室に飾りをつけたりして（資料—11）、学級生活を楽しく送るために自分で考えて行動する児童が見られるようになった。

表-1 学級活動アンケート

	質問項目	9月	11月
① 自分 に	教室や廊下に落ちているごみを自分から拾いますか。	82	84
	自分が見つけた花や生き物を教室に持ってくるがありますか。	59	65
	そうじのとき、みんながいやがってしないところも、進んでしますか。	88	76↓ -12
	自分でやってみてうまくいったやり方を、友達に教えてあげますか。	83	90↑ +8
	係活動で自分からアイデアを出したり、進んで係の仕事をしたりしていますか。	87	95↑ +8
	平均	80	82
② 友 達 に	友達が悲しんでいる時、そのわけを聞いてあげたり、一緒に考えてあげたりしますか。	89	90
	大事な物を落としたりなくしたりした友達がいたら、一緒に探してあげますか。	83	88
	友達の失敗で試合やゲームに負けても、友達のせいにならず許すことができますか。	95	93
	仲間外れにされている友達がいたら、遊び仲間に入れてあげますか。	93	94
	友達がいじわるをされているとき、注意をしたりやめさせようとしてしたりしますか。	88	88
	平均	90	91↑ +1
③ 学 級 集 団 に	みんなで遊ぶ日には参加していますか。	94	97↑ +3
	みんなで決めたことを守ることができていますか。	87	96↑ +9
	体育や図工など、みんなが準備や片付けをするときに、進んで動くことができますか。	87	95↑ +8
	友達や学級のがんばりに拍手したり「すごいね」とほめたりしますか。	88	96↑ +8
	みんなで決めためあてや目標を達成できるようにがんばっていますか。	89	96↑ +7
	平均	89	96↑ +7

		質問項目	9月	11月	
①自分のできることを考え、率先して行動することができる児童	自己への気付き	自分の気持ちがわかる。	91	86	
		自分の気持ちの変化がわかる。	80	91 ↑	+11
		自分のできることとできないことがわかっている。	88	81	
		平均	86	86	
	責任ある自己決定	自分だけ意見が違っても、自分の意見をはっきり言う。	88	86	
		ものごとを、よく考えてから決めることができる。	83	91 ↑	+8
		係の仕事をするとき、何をどうやったらいいか、自分で考えて決める。	84	94 ↑	+10
		平均	85	90	
	奉仕活動	困っている人を見ると、何かしてあげたくなる。	90	91	
		自分がしてもらいたいことを、友達にもしてあげる。	88	90	
		人の役に立ちたいと思う。	89	95 ↑	+6
		平均	89	92	
②友達に対して共感的に行動できる児童	他者への気付き	友達のいいところを見つけることができる。	93	93	
		友達の気持ちがわかる。	82	89	
		友達が何かじょうずにできたとき、「じょうずだね」とほめる。	90	93	
		平均	88	92	
	対人関係	友達の気持ちを考えながら話す。	87	90	
		相手がきずつかないように話す。	88	92	
		人の話をしっかりと聞く。	91	95	
		平均	89	92	

これらのことから、生徒指導や道徳、学級活動（１）・（２）を関連させ、相手を意識した活動の工夫は、思いやりのある児童を育む上で有効だった。現在、「仲良く助け合う相手を意識した清掃活動」を通して見られるようになった思いやり行動によって、喧嘩が減り、児童が居心地がよいと感じる学級に変化している。そうした学級の雰囲気の変化は、日常生活の様々な場面で、さらに友達に思いやり行動をしたいと思う児童の気持ち（資料—13）をかき立てている。

資料—12 掃除前に道具を用意する様

A photograph showing two children on a light-colored wooden floor. One child, wearing a pink shirt and blue shorts, is kneeling and moving blue blocks. Another child, wearing a black shirt and blue pants, is also kneeling nearby. Several blue blocks are arranged in a line on the floor, and several blue sticks are scattered around them. In the background, there are more blue blocks and a red bag.

[illegible]

そうじボックス

いひるやすみにおんがくをなら
してみとなるりのりでした。じょ
どとしたのしい学校をつくりたいし
たよりよりもたのしいきょうしつに
したいです。

3 C 小学校 第4学年の実践

(1) 題材名

「4の1ステップアップ計画 ～係活動で学級の力を高めよう！～」

(2) 目標

- 学級目標と照らし合わせて学級や自分自身を振り返り、成長や課題を見つけ、新たな目標を立てて実践していこうとしている。(関心・意欲・態度)
- 見つけた課題について、学級目標に近付くためのよりよい解決方法を考え、友達と話し合い、振り返りながら実践することができる。(思考・判断・実践)
- みんなでよりよい学級をつくることの意義やそのために行動することの価値を理解している。(知識・理解)

(3) 本題材と思いやりのある児童との関連

本題材は、児童のめざす姿である学級目標について年度途中で振り返り、これまでの成果と課題を明確にした上で、新たな行動目標を立て実践し、学級の姿がより学級目標に近付くことをねらいとしている。

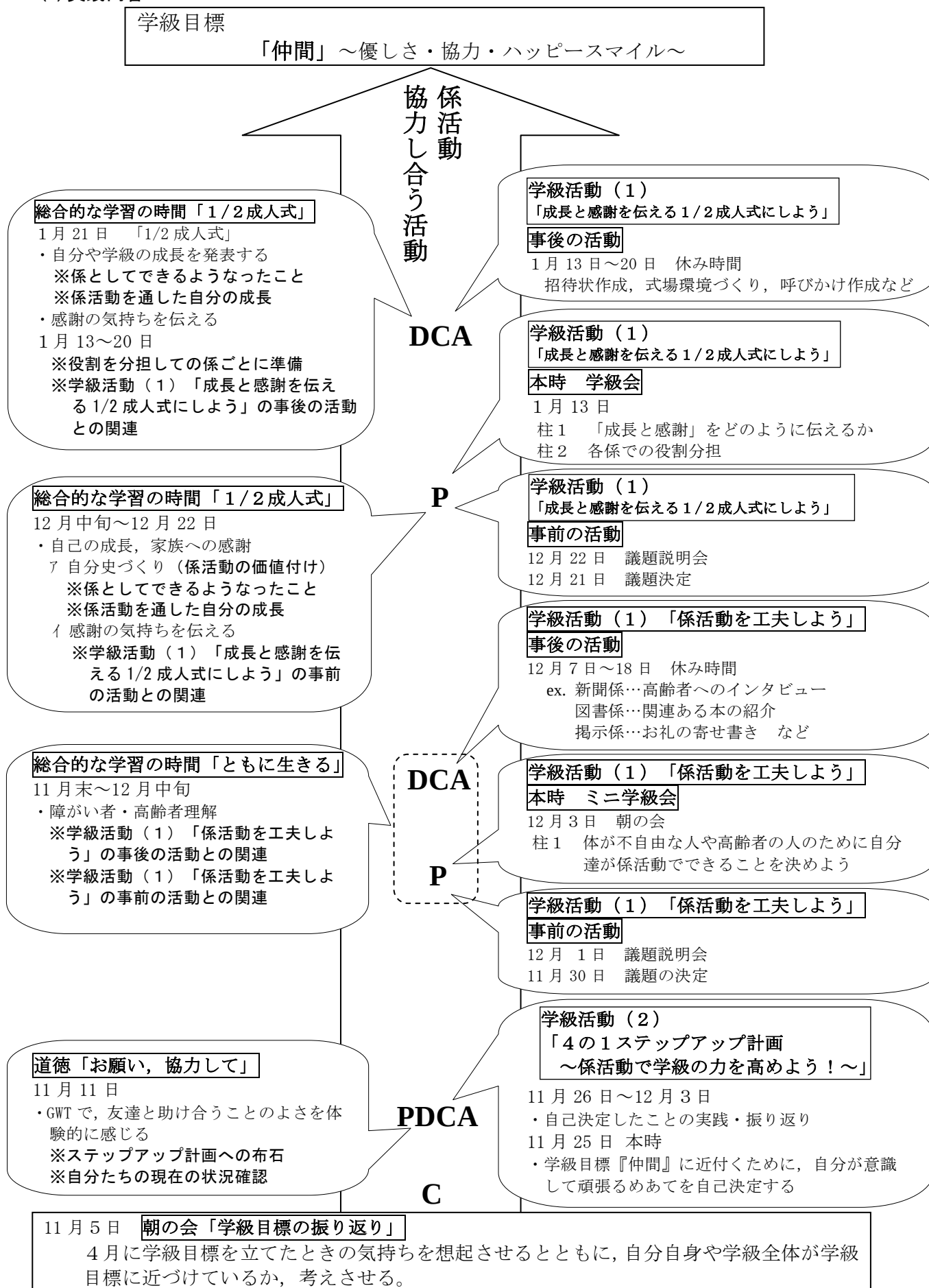
本学級の児童は、これまで、学級目標「仲間～やさしさ・協力・ハッピースマイル～」をめざし、学校生活を送ってきた。振り返りアンケートによると、友達の表出された行為に対して、よさを見つけたり、頑張りを賞賛したり、認めたりするといったことはできると感じているようだ。しかし、その一方で、相手の気持ちを理解したり、相手を傷つけないように話をしたりすることに苦手意識をもっていることも分かった。

そこで、この課題を解決するために、SEL-8SやGWTなどを活用してスキルアップの時間を取り入れつつ、研究副主題の「相手を意識した活動」として、協力し合い進んでみんなのために働く係活動を学級活動の軸として積み上げていくことにする。そして、係活動で積み上げた児童の成長は、3学期に行う二分の一成人式で報告する目標をもたせる。

まずは、係活動を活発にするために同じ係活動の仲間を意識しためあてを立てる。その際、話合いのときの言葉遣いや話の聞き方などを振り返り、同じ係活動の友達に対して共感的に行動できるようにしていきたい。次に、同時期に学習する「ともに生きる」（総合的な学習の時間）との関連では、係活動の中に高齢者や身体の不自由な方々を意識した活動を取り入れるようにする。例えば、新聞係は身体が不自由で困ったことをインタビューし、その内容を新聞にまとめ、新聞を通して、学級全体へ自分たちにできることを問いかけたり、図書係は図書室で障がいに関連のある本を探し紹介したり、掲示板係が福祉体験に来てお話ししてくださった方々へお礼の寄せ書きを作成したりするなどが考えられる。そして、係活動を通してつけた力を「二分の一成人式」（総合的な学習の時間）で発表するために、発表内容や役割分担を決めるための話合いを行い、自信をもって二分の一成人式に向かわせたい。

これらの活動を練り上げていく過程では、障がいをもった方々への思い、自分を育ててくれた大人や友達への思い、ともに係活動を作り上げていく仲間への思いなど、相手を意識することは避けられない。相手への思いやりをもって、互いに関わり合いながら、よりよい係活動づくりを通して学級目標「仲間」を達成する体験を味わわせたい。

(4) 実践内容



(5) 研究の実際と考察

〈研究の手立て〉

(1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成

11月以降の教育計画を見直し、教科・領域と学級活動をどのように関連させていくかを考えた。普段から興味をもって取り組んでいる係活動を軸に、学級活動の指導計画を修正した。具体的には、道徳の時間に「お願い協力して」の題材を配置し助け合うことのよさを体験的に取り入れる。それを布石に、年度途中で学級目標を振り返る学級活動(2)「4の1ステップアップ計画～係活動で学級の力を高めよう!～」を、さらに総合的な学習の時間「ともに生きる」の学習内容を係活動に取り入れ、そして総合的な学習の時間「二分の一成人式」と関連させた学級活動(1)「成長と感謝を伝える二分の一成人式にしよう」を新たに位置付けた。

「ともに生きる」と係活動の関連は、共通の話題を係活動で取り上げることによって「ともに生きる」の学びを日常化したいという意図があった。新聞係や掲示係は高齢者や障がいをもった方々にインタビューしたりお礼の寄せ書きを学級に呼びかけて作ったりするなど、活動が活性化した。これは、その時期の係の活動内容が「ともに生きる」の学習との関連に焦点化されたこと、誰を話題にするのか、誰に発信するのかといった相手意識が明確な活動であったことが有効だったと言える。

学級活動(1)「成長と感謝を伝える二分の一成人式にしよう」では、係活動を通じた自分たちの成長を保護者に伝える二分の一成人式にするために、どんな方法で表現するのか、そのための役割分担はどうすればよいのかについて話し合った。二分の一成人式で、学級活動の軸として取り組んできた係活動を通じた成長を保護者に伝えることによって、学級目標の実現を実感させ、自分や学級に対する誇りをもつだろうと予測した。

表-1①イ、ウのポイントが伸びている。これはみんなのために誰かのために、気づいて行動する姿である。表-1②エ、オの伸びは、相手を大切にしようとする姿の成長を示している。また、表-2①C「人の役に立ちたいと思う」の伸びも、学級集団への意識と共に自分への意識の高まりを示している。これは、10月以降、継続して総合的な学習の時間と関連させながら係活動を軸に学級活動を展開していったことの成果であると考えられる。活動の対象を学級の友達だけでなく、身体が不自由な人や保護者などに広げるとともに、活動を他者に発信し評価してもらう場を設けたことが有効だったと言える。

(2) 相手を意識させる活動の工夫

ア相手を意識しためあてづくり(めあて・振り返りシート)～行動に対する価値の自覚

学級活動(2)「4の1ステップアップ計画～係活動で学級の力を高めよう!～」にて、学級目標達成に対しての課題と原因、解決方法を話し合った。さらに、そこで立てた自己目標をもとに、めあて・振り返りシートを作成し、行動目標を係活動に絞って具体化させた。係活動に焦点化したことで、「乱暴な言葉遣いを優しくすることで、活動の中で喧嘩がなくなるだろう」など、実際の

資料-1 めあて・振り返りシート

めあて・わたしの目標は
わたしは、人によ、てたい産がちがうの、かえらないように
したい。言葉が少しらんぼうだから、やさしい言葉にしたいです。

特に係活動では
↓
係の話し合いのとき、言葉が少しらんぼうだから
いい言葉にしたいなあ。

自分がこの目標で頑張ると、自分のとき、
けんかが減るし、いい会もなくなる。

日時	活動の内容	感想
11/26	アンケートをつくら。	やさしい言葉を覚えてきたのだ。 今日は、けんかなど減ったのかもしれない。
11/27	つづき	今日は、うんは「うな言葉をつづき ないの」よめたぞ。
11/30	アンケートもいれるはこ を作った。	今日、らんぼうな言葉を少し減らした。 だから、いい会も減った。でも、うんは、 のひきは、めめれるようにしたい。みんなの話をきいた。

状況を想像しながら相手を意識しためあてを立てることができた。（資料－１）これは、表－１②のポイントの上昇に見られるように、友達を意識することに繋がったと思われる。

また、同じ係の中で誰がどんなめあてで頑張るのかを共有させた。（資料－２）お互いのめあてを知っておくことで、友達が意識して取り組んだ頑張りに目を向けやすくなったと考える。例えば、「話し合いが進まないときには積極的に自分からアイデアを出す」をめあてに頑張った児童に、感謝の気持ちを表す児童が出てきた。（資料－３）活動の振り返りに感想を書かせた。（資料－１）感想を書くごとに自分自身の行動の振り返りが深まり、「乱暴な言葉を優しい言葉に言い直すことはできたが謝ることができなかった。次は謝りたい。」といった言葉が見られるようになった。めあての共有や毎回の振り返りの感想により、仲間意識が深まり、より友達や学級の集団仲間を意識するようになってきたと言える。

資料－２ めあての共有

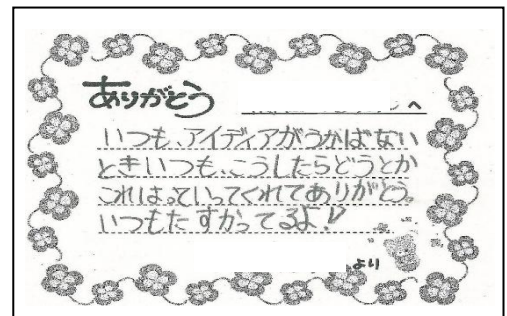


イ自己有用感を高める相互評価 ～活動に対する効力感の自覚

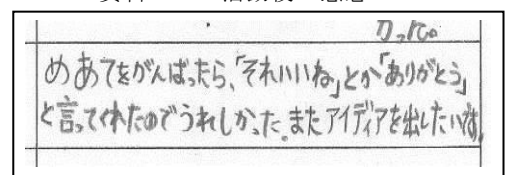
「ありがとうカード」と「がんばろうカード」を作成し、活動の後には必ずカードの記入をするようにした。その活動の中で感じた率直な気持ちを忘れないうちに書いて相手に伝えることができるようにするためである。

「ありがとうカード」には、事前にめあてを共有していたこともあり、友達が立てためあてに対してのコメントが多かった。例えば「話し合いの中で自分から進んでアイデアを出したい」とめあてを立てていた友達に、「ここの空いたスペースに４コマ漫画を入れたらどう？などアイデアを出してくれてありがとう。いつも助かっているよ。」という感謝の言葉が書かれていた。（資料－３）これに対し「めあてをがんばったら『それいいね』と言ってくれたり ～ 嬉しかった。またアイデアを出したい。」という感想からも分かるように、めあてを意識して頑張った自分を友達に認めてもらうことで有用感を感じ、そのことが次の活動への意欲を高めることにも繋がった。（資料－４）

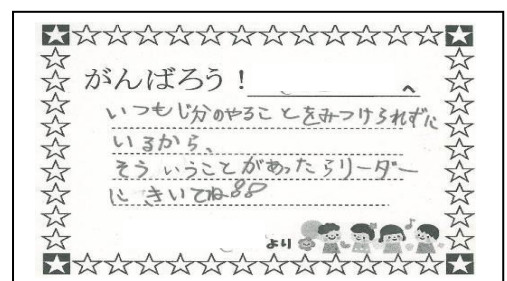
資料－３ ありがとうカード



資料－４ 活動後の感想



資料－５ がんばろうカード



「ありがとうカード」を渡す相手は、①自分と同じ係の友達へ②自分の係から違う係の友達へ③それぞれの各係へと３つの対象に設定した。資料－３のように、同じ係の友達に書くだけでなく、協力し合った他の係の友達やあるいはそれぞれの係にもカードを書いたりすることで、活動に対する効力感を互いに自覚し合うことができたと考える。これらの効力感の自覚は、表－１①エ、③エや表－２②aの友達を認める姿や、表－２①cの「人の役に立ちたい」のポイントの上昇にも表れた。

ウ協働する喜びを感じさせる小集団による活動 ～仲間からの援助経験の自覚

自分の好きなことや得意なことを学級のために生かす場が係活動であると考え。以前は、そのような場であるがゆえに、自分のしたいことを周りのことも考えずに押し通そうとする場面がしばしば見られた。しかし、前述のありがとう・がんばろうカードの成果もあり、表－２②bのポイントの上昇に見られるように、実践を通して、少しずつ自分の意見を伝えながら友達の見解にも耳を傾けることができるようになってきた。

児童は、「学級を楽しくするために」を合言葉に係活動を行った。個々のめあては「相手に嫌な思いをさせたらすぐ謝る」や「優しい言葉遣いで話す」といった同じ係活動内の友達を意識したものであったが、活動を重ねるごとに、行動や目標の対象が学級全体へと広がった。例えば、本の読み聞かせを実施していたスマイル Book 係（図書係）では、当初、自分達が読みたいお薦めの本を話し合い、読み聞かせるだけの活動だった。めあても「係の話合いのとき言い合いにならないように優しい言葉で話す」などであったが、次第に、アンケートを実施し、友達はどんな本を読んでもほしいのかを調べるようになり、さらに、読み聞かせ会に参加した友達が聞きやすいようにと「声の大きさや読むスピード」を意識して同じ係の友達と聞き合って練習に取り組むようになった。本を並べる際も、本の大きさ順や名前順など、どう並べれば友達が探しやすいかを考えながら並べるようになった。（資料－６）読み聞かせを聞く友達が増えたり、「読み聞かせが楽しかった」と言ってもらったり、本が綺麗に並べられるようになったりするようになったことで、協力し合うことのよさを感じるとともに、自分たちの活動に対する自信がもてるようになってきた。（資料－７）また、健康観察簿を保健室へ運ぶ仕事だけしていたほ・け・ん係（保健係）が「健康オリンピック」を開催したり、捕まえた生き物を教室で飼うだけだった４の１動物園（生き物係）が図書室で生き物について調べたことをクイズにし、クイズ大会をしたりするなど、他の係活動に触発されて活動が活性化した。

資料－６

探しやすさを考えて並べられた本



資料－７ 活動後の感想

習	一人で練習するより何人かでや 方がアドバイスがでよかった。 きてくれてうれしかった。楽しそうに 聞いてくれたのでアンケートを出したり 練習したりしてよかった。
---	---

エ活動内容や評価の見える化 ～活動の認知化

活動前に自分のめあてや一緒に活動する友達のめあてを確認させるためにめあてを掲示した。（資料－８）

そのことが活動意欲を高めたことに繋がったと言える。（表－１①オ③オ，表－２①bウ）しかし、出席番号順に掲示してしまった。係活動ごとに掲示しておけば、もっと見やすかったし、「一緒に活動していく仲間」という意識もより高まったのではないかと考える。また、「ありがとうカード」・「がんばろうカード」を掲示し、自分や友達の頑張りが目に見えて蓄積されるようにした。表－１③オの「みんなで頑張っていますか。」のポイントの上昇に見られるように、増えていくカードを見ることで互いの頑張りを合い高め合っていたと思われる。自分・友達・学級集団への意識の高まりが見える。活動の様子を写真で掲示するなど、活動内容の見える化を行っていればもっと活動が活性化したのではないかと課題も残った。

資料－８ めあてやカードの掲示



〈児童の意識の変容〉

（３）実態把握アンケート

「思いやり」についての児童の実態の変容を把握するために、実践の事前と事後にアンケートを実施した。学級活動アンケートの結果からは、全部の項目においてポイントの上昇が見られた。特に、表－１②、③においては、どちらも平均が 70 前半から 80 後半へと上昇した。理由として、係活動を積極的に行うことで友達との関わりが増えたこと、さらに、一緒に活動を行う友達や活動の対象となる学級の友達を意識したためあてを立てたことで友達を意識して行動するようになったことが挙げられる。SEL-8S アンケートの結果からは、表－２①b、②b の項目において平均のポイントの上昇が大きい。特に、「係の仕事をするとき、何をどうやったらいいか、自分で考えて決める。」の伸びが大きいことから、係活動を軸に実践をしてきたことで、自分の役割に責任をもつようになってきたことが伺える。また、表－２①b アの伸びが大きい理由として、友達との関わりが良好になったため、安心して自分の考えや意見を言えるようになってきたからではないかと考えられる。これは、表－２②b イ、②b ウについて伸びが大きかったこととも繋がっている。表－２①a についてはポイントに伸びが見られなかった。活動をする前後で自分の気持ちがどう変化したか振り返りの際に書かせるなどしてもっと意識させる必要があった。また、学習時間において、友達同士で教え合う姿をよく目にするようになった。優しい言葉遣いで説明しながら、相手の理解が深まると「すごい。できるやん。」などと声をかける姿も見られる。

これらのことから、相手を意識して協力し合った係活動の実践は、自分・友達・学級集団という相手に対して思いやりのある児童を育てていくには有効だったと考える。

表－２ SEL-8S アンケートの結果

表－１ 学級活動アンケートの結果			
質問項目		11月	12月
① 自分に	ア	教室や廊下に落ちているごみを自分から拾いますか。	62 68 ↑+6
	イ	自分が見つけた花や生き物を教室に持ってくるがありますか。	38 58 ↑+20
	ウ	そうじのとき、みんながいやがってしないところも、進んでしますか。	55 74 ↑+19
	エ	自分でやってみてうまくいったやり方を、友達に教えてあげますか。	72 84 ↑+12
	オ	係活動で自分からアイデアを出したり、進んで係の仕事をしたりしていますか。	62 75 ↑+13
	平均		58 72
② 友達に	ア	友達が悲しんでいる時、そのわけを聞いてあげたり一緒に考えてあげたりしますか。	77 90 ↑+13
	イ	大事な物を落としたりなくしたりした友達がいれば、一緒に探してあげますか。	74 85 ↑+11
	ウ	友達の失敗で試合やゲームに負けても、友達のせいにせず許すことができますか。	72 89 ↑+17
	エ	仲間外れにされている友達がいたら、遊び仲間に入れてあげますか。	71 88 ↑+17
	オ	友達がいじわるをされているとき、注意をしたりやめさせようとしてしますか。	60 80 ↑+20
	平均		71 86
③ 学級集団に	ア	みんなで遊ぶ日には参加していますか。	69 71 ↑
	イ	みんなで決めたことを守ることができていますか。	70 84 ↑+14
	ウ	体育や図工など、みんなが準備や片付けをするときに進んで動くことができますか。	77 90 ↑+13
	エ	友達や学級のがんばりに拍手したり「すごいね」とほめたりしますか。	71 92 ↑+21
	オ	みんなで決めたためあてや目標を達成できるようにがんばっていますか。	68 97 ↑+29
	平均		71 87

表－２ SEL-8S アンケートの結果			
質問項目		11月	12月
① 自分のできることを考え、率先して行動することができる児童	a 自己への気付き	ア 自分の気持ちがわかる。	98 93
		イ 自分の気持ちの変化がわかる。	92 89
		ウ 自分のできることでできないことがわかっていく。	78 86 ↑+8
	平均		89 89
	b 責任ある自己決定	ア 自分だけ意見が違っても、自分の意見をはっきり言う。	63 73 ↑+10
		イ ものごとを、よく考えてから決めることができる。	65 73 ↑+8
		ウ 係の仕事をするとき、何をどうやったらいいか、自分で考えて決める。	67 83 ↑+16
	平均		65 76
	c 奉仕活動	ア 困っている人を見ると、何かしてあげたくなる。	81 86 ↑+5
		イ 自分がしてもらいたいことを、友達にもしてあげる。	77 86 ↑+9
		ウ 人の役に立ちたいと思う。	81 91 ↑+10
	平均		80 88
② 友達に対して共感的に行動できる児童	a 他者への気付き	ア 友達のいいところを見つけることができる。	82 88 ↑+6
		イ 友達の気持ちがわかる。	72 79 ↑+7
		ウ 友達が何かじょうずにできたとき、「じょうずだね」とほめる。	84 86 ↑+6
	平均		79 84
	b 対人関係	ア 友達の気持ちを考えながら話す。	74 82 ↑+13
		イ 相手がきずつかないように話す。	72 82 ↑+10
		ウ 人の話をしっかりと聞く。	77 90 ↑+13
	平均		74 85

第Ⅲ章 研究の成果と課題

1 研究の成果と課題

(1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成について

- あいさつ、掃除、係活動を軸とした活動を学級の教育活動の中心に据えた。一つの題材を軸にして継続した指導を行った事により、題材は常に学級の話題になり、学校生活の質の高まりを示す指標となった。児童の活動意欲を持続するのに有効だった。
- PDCA サイクルをもとに、随時、振り返りと改善の話合いを行いながら軸となる活動を展開していく過程で、他教科・領域との関連や異学年交流等の活動が必然的に生み出され、活動への児童の主体性や活動意欲は高まった。教育活動の中心に据える学級活動を明確にすること、検証改善により活動の質を高めていくことは、教科・領域の連携、異学年交流を進め、児童の主体性や活動意欲を高めるのに有効であった。
- 一つの題材において学級活動(1)(2)のつながりをもたせ、意図的・計画的に年間計画に配置した。学級活動(2)の指導は個人の意識や行動力を高めた。さらに連動させた学級活動(1)の活動では、学級活動(2)で高まった個人同士がつながり、取組は点(個)から面(集団)へ変化して学級のブランド、すなわち、自分達の誇りになった。そのブランドを一層高めるために、児童は異学年児童に働きかけたり、友達と助け合ったり、協力し合ったりするなど、活動に広がりや発展が生まれた。このように、学級活動(1)(2)を連動させて配置したことは、児童の活動意欲や相手意識を高め、活動に広がりや継続性・発展性をもたせるのに有効だった。

(2) 相手を意識させる活動の工夫について

ア 相手を意識しためあてづくり ～ 行動に対する価値の実感

- 活動のめあてを立てる際、「自分が～行動したら、相手や周りはどう思うか」と自分の行動に対する相手の気持ちを考える場をつくった。このことは、自分の行動が他者へ影響を与える他者性を意識させ、相手にとっての自分の行動の意味や価値を考える場として有効だった。

また、行動の振り返りの際、活動当初にめあてを立てた時に自分が予測した相手の気持ちと実際とを比較させた。このことは、相手に与える自分の行動の影響や、自分の行動の価値を考えるのに有効だった。

- 経験が不足している低学年にとっては、題材によって相手を意識しにくいものがある。毎回、めあてづくりの際に「相手はどう思うか」を予測することは難しい。活動の中で、随時相手を意識させる問いかけや立ち止まりが必要である。

イ 自己有用感を高める相互評価 ～ 活動に対する効力感の自覚

- 「ありがとうカード」・「がんばろうカード」といった相互評価や自己評価については、一定期間毎日、あるいは活動の節目に、各個人にカードを手渡ししたり、各活動グループにコメントしたり、あるいは朝の会・帰りの会でカードの内容を全体発表したりするなど、児童の活動の様子を教師が把握しながら方法や形態を工夫した。このことは、自分が認めてもらったことに対する自信や喜び、すなわち、自己有用感と、その有用感があるからこそ相手のよさを見つけようとする共感性・思いやりを高めるのに有効だった。
- 友達から「ありがとうカード」・「がんばろうカード」をもらうことは、自分の行動を客観視し、次の活動に繋ぎ高めていくのに有効である。
- カードを用いて自分の考えや気持ちを書き言葉で表現するので、柔らかい言葉を使うように

なった。児童のとげとげしい言葉が減り、学級では喧嘩が減ってきた。柔らかい言葉遣いはよりよい人間関係をつくっていく。

- カードの形式や活用方法については、さらに工夫が必要である。書くことについて苦手意識のある児童への対応や、教師の補足の言葉などにより、一層、児童の行動に対する価値を高め、効力感を自覚させることができる。

ウ 協働する喜びを感じさせる小集団による活動 ～ 仲間からの援助経験の自覚

- あいさつを広げるために、取組を同じにするグループ内で知恵を出し合い、活動を工夫し合って全校に広げていったこと、自分たちの学級の「そうじ」にプライドをもち自主的に掃除部を結成して新しい活動をグループの仲間とともに知恵を出し合って創り出していったこと、係と係をコラボレーションして自分たちの思いを全校に発信したこと、このような仲間とともに行った成功体験は、「友達と一緒にだったからこそ、助け合って協力し合って、やり遂げることができた。」という仲間からの援助経験を自覚させた。このことから、今回の小集団による活動は、相手を意識させ思いやり行動を促す活動として有効だった。

- 活動の目的や場の設定、グループの人数、メンバーの構成の仕方、活動過程における教師や仲間の励ましや助言、活動の評価方法の工夫といった細やかな手立ては、協働する喜びを感じ合う集団に高めるために、必要である。

エ 活動内容や評価の見える化 ～ 価値の認知化

- 児童の活動の様子やそれに伴う環境の変化を撮った写真や動画を、教室や廊下に掲示したり示したりすることで、児童は取組に対する互いのよさに気付いたり活動の手応えを実感したりしながら、次の活動への意欲を高めた。
- 見える化された児童の姿や言葉は、児童の取組や活動の価値を実感させるとともに、これからの目指す姿や活動をイメージしたり予測したりすることに有効である。

(3) 実態調査と行動観察による見取り

- 児童の表情・言動の動画や写真、発言メモ、観察メモ、カードに示された児童の言葉から児童の思いやりを見取った。これらの見取りから、児童の思いやり行動が増えてきている手応えを感じている。学級活動アンケートでは、めざす思いやりのある児童像である「自分・友達・学級集団」に対する行動を思いやり測定尺度をもとに自己評価を行った。特に友達・学級集団への思いやり行動の数値が高くなっている。仲間と仲良く助け合う活動に対する達成感が大きかったのではないかな。これらは、観察による見取りで感じた思いやり行動の増加と合致する。

アンケートと呼応するように SEL-8S も項目により多少のばらつきはあるものの、おおむね 9 月より 11 月の数値は高くなっており、自分が行動するときの相手への関わり方に対する内面の成長が分かる。自分、友達、学級集団といった相手への思いやりは育ってきていると言える。

これらのことから、道徳、総合的な学習の時間、生徒指導・学校行事等の教育活動と学級活動(1)(2)を連動させた PDCA サイクルに基づく年間指導と、4 つの相手を意識させる活動の工夫は、思いやりのある児童を育むことに効果があったと言える。

注

- 注1 共感性とは「感情移入」の意味の心理学用語。最近では「相手の感情と同じものを自分の中で経験する～情動的側面」と「相手の立場に立って相手の気持ちが分かる～認知的側面」の両側面を統合した定義が主流。(小池はるか 共感性尺度の再構成 2003 より)

2 コメント

(1) はじめに

前々年度のテーマは「他者と関わり合い、認め合う力を育てる学級活動の在り方（2年次）－PDCA サイクルにおける振り返り活動の工夫を通して－」として、特別活動の目的である「望ましい人間関係」形成に向けて、年間計画を策定し指導と評価を PDCA サイクルでとらえ、児童・生徒の成長・発達を時系列的な調査を実施してとらえようとした。

前年度の研究テーマは「認め合い、高め合う力を育てる学級活動の在り方－思いや考えを伝え合う場の工夫を通して－」である。自己－他者が相互に「認め合う」ことを通じて学級活動を「高め合う」能力の獲得を目的とした。副主題にもある「思いや考え」を「伝え合う」行為を通じて、学級活動（場の設定）で児童・生徒の相互の交流活動を活性化させ、積極的に他者に働きかける行為を生みだし、それらを通じて自己・他者の成長を支える集団効力感を高めるものとした。本年度の研究は、前々年度・前年度との関連を想起させるテーマ設定となっている。

前年度の研究方法（手だて）としては、前年度は、「ア：交流活動の工夫（(ア) めあて・振り返りシートの作成・活用, (イ) ありがとうカード・がんばろうカードの作成・活用, (ウ) 交流時間の確保）」、「イ 活動内容の見える化」という指導法で研究を進めた。今年度は「思いやり」という児童の価値観の変容をもたらす指導法として、「(1) PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成」「(2) 相手を意識させる活動の工夫（ア：相手を意識しためあてづくり（めあて・振り返りシート）～行動に対する価値の自覚, イ：自己有用感を高める相互評価～活動に対する効力感の自覚, ウ：協働する喜びを感じさせる小集団による活動～仲間からの援助経験の自覚, エ：活動内容や評価の見える化～活動の認知化）」、「(3) 実態調査と行動観察による見取り」の3つの指導法で行っている。今年度の特徴は特別活動の「年間指導計画」を明確に研究枠組みに据えた部分である。年間を通じて、軸となるテーマ（そうじ・あいさつ・仲間・協力）を継続的に実践したことにある。前年度の研究結果の関連では、学級会ノートやチェックシート、学級全体へのフィードバック（情報発信）のプロセスを再構成して取り入れたものとなっている（平成26年度研究紀要・特別活動参照）。

本研究室の基本的な研究的アプローチは変わっていない。研究を継続している部分が多く、特に指導の工夫については特別活動研究室としての基本的な部分は変化していない。研究対象については、小学校3学級（1年生・2年生・4年生）である。前年度より継続している研修員は1名であり（2年生）、2名は今年度より特別活動研修室で研修を行うことになった（1年生・4年生）。前年度と比較すると低学年が多く、新たな取組ともいえる。

前年度より継続している研修員は、前年度の研究活動の継続性を踏まえながら実践を行っている。指導的な立場として研究の方向性に対してリードしてもらった。先述した特別活動研究室の指導の工夫に関しては、同教員が培ってきた指導経験、特別活動研究室の指導方法、それらに加えて今年度のテーマに沿った発想やアイデアを提供してもらった。

今年度より研修を行っている研修員2名は、特別活動の授業研究を意欲的に進め、優れた授業実践報告につながった。今年度の研究テーマは新たな取り組みも多いため、当初は試行錯誤を繰り返しながら進めて行くという状況であった。それに関わらず、3名がチームとして協力しあいながら、個々の学級指導能力を活かして研究論文としてまとめている。3名の研究は、特別活動研究として優れた実践研究になっているのではないだろうか。

(2) 研究の成果と課題

特別活動研究室の成果は、広く福岡市内の小中学校の各学級や教育課程編成へと還元されるべきものである。そのためにはより学校現場での導入を考慮した実践性、児童生徒への成果還元の普遍性の双方が求められる。これらを視点として本研究の成果を再考する。

○「PDCA サイクルに基づく年間指導計画の作成」について

特別活動研究室の研究枠組みとして、ここ数年共通しているのは「学級活動（１）・（２）」における「話し合い活動」を研究対象とするのではなく、複数回の学級活動を関連付け、その間の日常的な教科・領域における教育・学習活動を含めて研究対象としている部分にある。学習指導案に基づいた特定の単元や授業〈本時〉実践のみを対象とするのではなく、授業実践を中心に各活動をつなぎ合わせて指導計画を検討する。必然的に、学級レベルの年間指導計画編成及び再編に影響を与えることになるが、その部分は特別活動という児童生徒の成長・発達に伴い、学校生活が変容するという特質を考慮している。前々年度で取り上げた「PDCA サイクル」という用語が今年度も使用されているのも、本研究室の研究枠組みの特色である。

本研究ではマネジメントサイクルという用語の対象は、特別活動を中心とした教育課程再編を対象としているため、カリキュラムマネジメントと捉えることもできる。そのため児童生徒の成長・発達に伴って教育課程を再編することが求められる。実践事例でも、研修員の予測を超える児童の行動変容は、カリキュラムマネジメントの一つの成果を示している。

しかし、マネジメントサイクル（PDCA サイクル）の成果は、予定調和的に経営計画を実現させることによって示されるものとも考えることができる。今回の実践事例の児童の反応は、研修員の当初予測を超えて表出している。児童の反応（「思いやり」の行動変容）が予測以上に表出することは、一つの成果であり、一方では十分な成果とは言えないとすることもできる（本来であれば、予測を超える児童の反応も予測範囲に含めておかなければならないはずである）。学年間のカリキュラムの系統性を考慮した場合、このような事象をどのように捉えるのか、特別活動研究であるからこそカリキュラムマネジメントという視点からの分析しにくい要因を含んでいる。実践研究がまだ端緒の時期でもあるため、継続的な研究の蓄積が必要である。

○「思いやり」の認知・行動の評価

前年度の研究成果を発展的に捉え、本年度の研究テーマを設定したが、これらに対応する分析方法を十分に構築できたのかは未だに検討すべき課題である。前々年度の「関わり合い・認め合う力」、前年度の「高め合う力」という児童生徒の能力感を新たに「思いやり」という認知・行動を捉えようとした。本年度の研究では「思いやり」という認知・行動を「向社会的」な行動として表出するものとして設定した。この「向社会的」行動という部分について、どの程度評価できたのかは更に検証が必要である。

「向社会的」行動とは、外的な報酬を期待することなしに、他者を支援し、他者のためになることをする行為としてとらえている。「思いやり」の価値観の醸成については、研究活動期間における児童の認知変容の報告を分析する限りにおいては、一定の成果を得られている。学校生活の質を高めるというテーマのもとに「そうじ・あいさつ・仲間」という「軸＝主要テーマ」を設定し、児童間の話し合い・コミュニケーション機会を設けることによって、価値観の醸成に影響をもたらしたのではないだろうか。PDCA サイクルという「繰り返し・振り返り」といった改善プロセスも、学級内での児童

間コミュニケーションに変化をもたらしたものと推察できる。

評価項目としての「学級活動アンケート」「SEL-8S」についての結果も、事前一事後調査の結果を比較すると、児童の認知に一定の変化がみられる。「学級活動アンケート」は本研究室で作成したアンケートであるが、先行研究に基づき、児童の学級集団に対する認知を捉えるものとして設定している。一方のSEL-8S アンケート（小学校低学年版）は個人の社会性育成の変容を捉えるものとして本研究で活用することとした。

結果としては、全ての事例において、認知が高まっている。このことから、学級に対する認知の変容（学級活動アンケート）、個人の社会性に対する認知（SEL-8S）に対して、「思いやり」に対する学級活動（２）（１）を通じた話し合い活動が要因となって児童の認知に変化が生じたこと、それらが「思いやり」行動の表出されたものと考えている。

しかし、認知の成果は示すことができたと考えているが、どのような行動を「思いやり」行動とするのか、その分析視点では、課題が残っている。「向社会的」行動がもたらす行為は、結論付けると「他者」存在に必ず有益であることをもたらすというものではない。他者との話し合いや実践を通じて、「思いやり」行動が表出していくのであるが、最初から「全て」の児童がこのような「思いやり」行動が選択できることは想定しにくい。おそらく、学級内での複数の児童の「思いやり」認知の変容をきっかけに（中心的な役割を担う児童）、集団内への関わり方の認知の伝播（コミュニケーション機会における児童観の共有化体験）、児童間のコミュニケーションの変容のプロセス（活動の共有化を通じた体験活動を含む）が存在する。この部分の行動変容の表出・形成過程についての十分に分析をすることはできていない。

「思いやり」行動の変化のプロセスの過程において、特徴的に表出する行動指標という視点で分析ができなかった。学校現場の実践では認知変容の高い児童の「表出行動」、そこから学級内児童全体の「共通行動」の見取りをどのような視点で分析すれば良いのか、その部分を求めているのではないだろうか。再度調査データや現状の児童の実態を検証することを通じて、この部分については継続的に研究を進めて行きたい。

次年度においては、是非とも初期の児童生徒の「行動表出」、学級内の「共通行動」の分析を含めて継続を研究していければと考えている。

資料等

引用文献

- 1 国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究代表者 勝野頼彦
教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 第2章 P9-12
国立教育政策研究所 (平成25年)
- 2 文部科学省 初等教育資料 No. 927 P69 (平成27年)
- 3 伊藤順子 向社会性と動機付け～関係論的発達の視点からの提案 (2008)
- 4 安達圭一郎 児童・生徒の思いやりに関する発達的研究 (1996)

参考文献

- 1 文部科学省 小学校学習指導要領解説特別活動篇 東洋館出版社 (平成20年)
- 2 文部科学省 第2期教育振興基本計画審議過程報告 (平成24年)
- 3 文部科学省 学習指導要領改訂 教育課程企画特別部会 論点整理 (平成27年)
- 4 文部科学省国立教育政策研究所 杉田洋
楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動 株式会社 文溪堂 (平成25年)
- 5 中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会 第47回
特別活動の現状と課題, 改善の方向性 (検討素案) 資料5-2 (平成27年)
- 6 文部科学省 初等教育資料 No. 925 No. 927 東洋館出版社 (平成27年)
- 7 小泉令三 社会性と衝動の学習(SEL-8S)の導入と実践 ミネルヴァ書房 (平成23年)
- 8 小泉令三・山田洋平 社会性と衝動の学習(SEL-8S)の進め方小学校篇
ミネルヴァ書房 (平成23年)
- 9 福岡市教育委員会 新しいふくおか教育計画 (平成21, 26年)
- 10 深谷和子 児童心理9月号 金子書房 (平成25年)
- 11 田沼茂紀 心の教育と特別活動 北樹出版 (平成25年)
- 12 辰野千尋 指導と評価 7, 10, 12月号 (平成22, 18, 20年)
- 13 狩野浩二 新しい特別活動 子供の事実学ぶ, 考える教師になるために あいり出版 (平成26年)
- 14 日本特別活動学会 改訂キーワードで拓く新しい特別活動 東洋出版 (平成22年)
- 15 古川哲生 共感性と外向性が友人のつきあい方と思いやり行動に及ぼす影響について (2008)
- 16 中澤清 向社会的行動における共感能力と援助コストの関係に関する研究 (1993)
- 17 近田悠花 玉木健弘 学級風土が児童の思いやり行動に与える影響 (2012)
- 18 小林美佐子 思いやり尺度の作成 (2013)
- 19 杉村僚子 発達障害をもつ子どもの向社会的行動に関する研究動向 (2009)

研修員

- 中 村 麻 衣 (弥永西小学校教諭) 吉 浦 沙也加 (和白東小学校教諭)
甲 斐 宝 章 (城浜小学校教諭)

研究指導者

- 大 竹 晋 吾 (福岡教育大学教職大学院 准教授)
満 田 文 恵 (教育センター 研修指導員)